

子どもたちの学力の現状  
－PISA 等の国際調査結果から－

猿田 祐嗣

國學院大学人間開発学部初等教育学科教授

我が国の子ども達の学力の現状について、国際的な比較調査のデータに基づいて報告を行った。全国的な規模の学力調査としては、国内では文部科学省が実施している「全国学力・学習状況調査」があるが、国際的な学力調査としては 2000 年から 3 年おきに調査が実施されている OECD の「生徒の学習到達度調査 (PISA)」が知られている。この調査は、OECD 加盟 34 か国が参加し、義務教育修了段階の 15 歳児 (我が国の高校 1 年生に相当) を対象として、読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシーの 3 分野における学力、特に実生活の様々な場面で直面する課題に活用できる能力を各国共通のペーパーテストの成績で比較しようとするものである。我が国は 2000 年の調査開始から 2006 年の第 3 回調査までは、各分野とも成績が低下傾向にあったが、その後、2009 年、2012 年の第 4・5 回調査では回復傾向が見られた。これは、文部科学省が施行した新しい学習指導要領において理数教育や言語活動に重点をおくようになったことが効を奏していると考えられる。義務教育段階では今後、基礎的・基本的な知識・技能の修得とともに思考力・判断力・表現力といった高次の能力の育成もバランス良く行っていくことが求められている。